



岸田首相の聞く力はどこを向いているのか

岸田首相は福島原発のトリチウム水問題では国民の声、全国の漁業者の声どころか、福島漁業者の声さえ聞いていない。

中国等、近隣諸国の声も聞いていない。

岸田首相はトリチウムを含む排水の海洋放出について「周辺国から一定の理解を得た」と豪語していた。

各国は日本政府の方針を知識として理解したが、了承も納得もしていない。これが「一定の理解」だ。

中国は日本からの海産物の輸入を禁止。政府は「抗議」をしているが「形だけの抗議」に見える。

放出前に中国と誠心誠意議論するのが政府の役目だ。トリチウム水をどう処理すべきか、中国と話し合えば良い。

トリチウムは四十年で一割に減るから、今すぐ放出しないで貯めておくのも一案だ。

風評被害対策八百億円を更に数百億円積み増しすると云う。それは新たな利権を生む。

海洋放出が安上りと云う説明も怪しい。

向き合う相手は？

自公政府は、外国が海産物を買わなくなり漁民が困っても、福島原発問題の一つの象徴トリチウム水を強引に片付けたいようだ。

福島原発を片付け、各地の原発を再稼働すれば原子炉の燃料棒を買う事になる。

自公政権が一生懸命向き合おうとしているのは、日本に燃料棒を売る米国企業であり、米国ではないか？

そして原発関連の大企業だけではないのか？

あなたはどう思われますか？

白しら
樫かし

千葉県我孫子市天王台駅北口
二〇二三年八月



我孫子は江戸時代、水運で栄え、利根川の主要な河岸であった。江戸から水戸街道を通り、銚子への道の分岐点でもあった。

大正から昭和初期にかけて「北の鎌倉」と呼ばれ、志賀直哉、武者小路実篤、柳宗悦、バーナード・リーチなど多くの著名な文化人が居を構えたり別荘を持った。そして白樺派の拠点となっていた。

我孫子は利根川と手賀沼の間の両総台地上の街。一九七〇年頃から東京のベッドタウンとして急速に開発された。

我孫子駅と取手駅が離れていたの、間に天王台駅が作られた。

後に区画整理され、絵のような白樺の並木も設けられた。

